

オバマ大統領

突然のお手紙、失礼いたします。

私は川野登美子と申しまして、広島市の平和記念公園にある「原爆の子の像」のモデル「佐々木禎子さん」の小学校時代の同級生で、像の建立にも携わった者です。

「原爆の子の像」が建立に至った真実をお伝えし、歴史的なものとして聞き流し終わらせるのではなく、誰にでも起こりうる身近な出来事だったという事を、オバマ大統領はじめ、アメリカや全世界の子供達にも知って頂きたくて、このお手紙を書きました。

禎ちゃんが通っていた幟町小学校 6 年竹組の私達は、3 分の 1 が被爆者で、クラスのほとんどは、何らかの形で戦争の痛手を受けていました。大陸から引き揚げた子供や、戦争で両親を失った子供も多くいました。

禎ちゃん自身も満 2 歳の時に被爆しましたが、その後は活発な少女に成長していました。

1955 年、6 年生の 1 月、突然禎ちゃんが学校を休みました。

先生から「原爆症」の治療の為と聞かされた時、私は「禎ちゃんが可愛そう」という気持ちと、「禎ちゃんでもなくもし私だったら」という恐怖が同時に起こり、何とも言えない不安に襲われました。

みんなも同じ気持ちだったと思います。

信じられず泣きだす子もいました。

「原爆症」はうつるなどの偏見を持つ人もおり、周りの人からの無理解に苦しめられました。

禎ちゃんが心配で何度もお見舞いに行き、入院してから小学校を卒業するまでの 1 ヶ月は途方もなく長く感じました。

中学校に進学しても禎ちゃんを支えなければと「団結の会」を結成し、卒業後も交代でお見舞いに行っていました。

「中学校はどんな?」「英語は難しい?」などと質問されると、私たちはもう禎さんが中学校に来ることができないと知っていたので、応えるのが辛く、「中学校なんかつまらないよ」「小学校がよかった」とその場を取り繕うのがやっとでした。

折り鶴は今では平和のシンボルとなっていますが、その発端は禎ちゃんが病床で「折鶴千羽折れば病気が治る」と信じ折り続けたことが始まりとなっています。

体調が悪くなる中、それでも懸命に折り続けたのは、禎ちゃんの「生きたい」「生きたい」

という強い願いからでした。

「団結の会」では卒業後も禎ちゃんのお見舞いを続けようと約束していましたが、秋ごろにはお見舞いになかなか行けなくなっていました。

そんな頃、1955年10月25日、禎子さんは白血病により12歳の若さで永遠の眠りにつきました。

「戦争が終わって10年も経った今になってなぜ」「なんで禎子ちゃんが」というやり場のない感情が沸き上がると共に、「私も被爆しているけど…」と自分自身が不安になる事もありました。

禎ちゃんに何もしてあげられなかったという無念さが残り、禎ちゃんの為に何か自分たちに出来ることはないだろうかと考え、私たち「団結の会」は原爆で亡くなった子供たちの霊を慰め、平和を築くための像を作ろうという運動を始めました。

たまたま広島で開催された全国中学校校長会の会場前で手作りのビラを配り、全国の中学校に像を建てることに賛成してくれるよう呼びかけました。

運動の趣旨に賛同して全国からたくさんの募金が送られて来るようになり、やがて市内の小・中・高校を巻き込んだ大きな運動に発展し、各校の生徒会で組織された「広島平和をきずく児童・生徒の会」が結成されました。

6年竹組クラスメートの素朴な思いから始まった運動は、全国の学校へ思いが届き、禎ちゃんの死から1年後の10月には像の建立が決まり、現実のものになりました。

これは 僕たちの叫びです

これは 私たちの祈りです

世界に平和を築くための

台座に刻まれた私たちの「心の文字」です。

禎ちゃんは生きられなかったけれど、同じように被爆した私は今でもこうして生かされています。

禎ちゃんの無念を晴らすことは私には出来ませんが、せめて禎ちゃんの事を一人でも多くの方へお伝えする事で「戦争」のない平和な世界を作るお役に立ちたいと思っています。

禎ちゃんの事を話すと、当時を思い起して涙することがあります。

「この辛い思いを出来れば思い出したくない」この思いと闘い続けながら、それでも私にしか出来ない語り継ぐ使命を深く感じ、語り部として県外からの修学旅行生や市内の小学校の子供達に、当時の話を語り続けています。

広島には原爆で亡くなった方や、後遺症で悩まされた方が数多くいらっしゃいます。

禎ちゃんの死をきっかけに、私たちは戦争の本当の恐ろしさ、無残さを身近な事として伝えたいのです。

不治の病という絶望的な状況で、最後まで自分にできる努力を続ける禎子さんは、困難に立ち向かう勇気を私たちに教えてくれました。そして、子どもたちの力だけでも、友情と平和への強い思いをもってすれば願いが叶うという「団結」と「継続」の大切さも学びました。

先日のオバマ大統領の来広は、被爆者の一人として非常に嬉しく思っております。どうか禎ちゃんや私たちと同じ思いをする子供たちがこれからの未来に現れないように、身近で大切な人が悲しい思いをしないように、核兵器廃絶に向けたメッセージを世界に発信していただくことを願っています。

平和な未来を託しています。

広島市立幟町小学校 6年竹組 卒業生 川野 登美子 (旧姓 横田 登美子)